



今月の監督 倉俣 徹

くらまた・とおる 1962年2月7日
 生まれ。群馬県出身。桐生南
 高一東京学芸大→東京学芸大
 大学院。現役時代は内野手。大学卒業後、
 下仁田高定時制の教諭を務めながら大学
 院で運動学を専攻。その後渡米してスポ
 ーツ医学を学ぶ全米アスレティックトレー
 ナース協会公認資格を取得。帰国後、
 巨人に誘われて1994年から通訳、トレ
 ーニングコーチを務め、現在はジャイ
 アンツアカデミーのヘッド・コーチ。



**日本の伝統を踏襲も
段階を踏んだプログラム**

——倉俣監督は現在、ジャイアンツアカデミーのヘッド・コーチ職に就かれています。一方でどういう経緯で高崎ジャイアンツボーイズは誕生したのでしょうか。

倉俣 私がジャイアンツで仕事をすることになったのは、1994年からの通訳です。この職を5年務めて、トレーニングコーチを4年。そのあとにフロントに入り、2005年からジャイアンツアカデミーで仕事をしています。その通訳をしているとき、オフの3カ月の間に高崎の自宅スペースを使って地元の中학생たちにトレーニング指導をしていたんです。ただ、市内の16ある中学校の軟式野球部に経験のある顧問の方がいる学校が2校しかない現実もあって、子どもたちに技術指導もするようになりました。

——それならばチームをつくったほうが効率が良くない？

倉俣 早い話がそういうことです(笑)。最大で230人の子どもたちが通っていましたから、2002年にチームをつくらう。と。ただ、私は東京が勤務地で一軍の遠征にも帯同します。ですから、最初は代表という立場でチーム運営にかかわり、その後今の立場で子どもたちを見させてもらっています。基本的に平日はジャイアンツアカデミー、土日はこのチーム。1週間のうち7日、子どもたちの指導です。休みはいつでしょうね(笑)。ありがたいことです。

——その熱意の発展といいますが、倉俣監督はいろいろな練習ドリルをチームのHPで公開されていますね。

倉俣 幸いにも私はアメリカやドミニカ共和国、キューバなど中南米の野球を学ぶ機会がありました。その上で導き出した数々の練習ドリルなわけですが、これを自分たちだけのものにしても日本の発展はないと考えています。アメリカ、キューバ、そして日本。世界の野球をリードするのはこの3国です。ここから陥落しているようでは、日本の野球人気は陰りが出ていると言ってもいい。その底辺を支える意味でも、中学野球全体が

レベルアップできればと思っています。アメリカはまだしも、中南米の野球を経験できることなんてことはそうありませんよね。私は皆さんを代表して学んだものと思ひ、その財産を共有していただくということです。

——この号の特集では日本代表についてクローズアップし、さらにはWBCが開催。世界から日本の野球というのはどのように見られているのでしょうか。

倉俣 日本が評価されている要素は、「礼儀礼節」「高い技術力」「優れた機動力」。足を駆使して1点を取る戦略は世界から絶賛されています。これは15歳以下の国際大会でも評価は同じ。日本に野球が伝わって以来、独自の発展を遂げて培われてきた伝統ですから、踏襲していくべきだと私は考えています。

——そういった要素を踏まえて、具体的に選手たちに落とし込んでいることというのは？

倉俣 私はまず、何事も型の習得からだと考えています。柔道、剣道、空手といった武道と一緒に、投げる、捕る、打つという動作の型をつくるのがベース。その次に、ボールを使っても同じことができるようにする。例えば、短い距離から遠くへ徐々に離れながら、型を意識して狙ったところに投げられるように



高崎ジャイアンツボーイズでは、練習の一環としてフラットクラブを使用する。当然、これでは完璧な捕球動作はできないが、クラブとボールが接触してからの素早い握り替え技術を磨くことができる

中学硬式指導者インタビュー

Big Inning!
(高崎ジャイアンツボーイズ)
 ボーイズ・リーグ

倉俣徹氏はプロチームが運営するジュニア指導を本職とする。
 一方で中学硬式チームの指揮を執る顔も持つ。
 情報を広く公開して中学球界の底上げを信念とする同氏のチームづくりに迫る。

取材・写真/山内浩太